

ピーピピッピー。線量計からアラーム音が鳴り響く。「8マイク口。8・4、8・56...。あー9マイク口越えちゃった。ここは福島県南相馬市と浪江町の境界、Y牧場のゲート前。餓死した牛の頭蓋骨が並び、「東電、国は大損害を償え」「殺処分反対」などペンキで書かれた怒りの看板。3月13日、福島第1原発20キロ圏内の立ち入り禁止区域に入った。ゴーストタウンと化した、半永久的に住めなくなった故郷。原発から「風下の町」をレポートする。  
(編集部)



餓死した牛の頭蓋骨と東電への抗議看板が並ぶY牧場

# いまでも続く 海洋汚染や放射能漏れ

## 原発再稼働で「明るい未来」はあるのか

「最初にこの検問所を通過する時は緊張したけど、今は慣れちゃった(笑)」。本日は、私を案内してくれるのは、南相馬市原町区で、和洋菓子店「松月堂」を営む横川徳明さん、千代さんご夫妻。南相馬市役所から横川さんの車で国道6号線を南下すること10数分、前方に機動隊が検問所をつくっている。許可証を見せて、圏内に入る。6号線を南下、人もすれ違う車もない、不気味な静寂が続く。国道左手の海側は、津波で流され何もなくなってしまう平原。その向こうに波しぶき。「ここから海が見えるなんてねえ。風景がすっかり変わっちゃったね」ハンドルを握る横川さんがつぶやく。



案内していただいた横川夫妻

かつての田んぼ、家屋だったところに津波で流された車や自動販売機。一年前、3・11のまま、時が止まっている。検問ラインから10分も走ると、松月堂の倉庫。横川さん夫妻が、海が見える国道脇に花を手向ける。「この辺りは津波で亡くなった人が多くてね。月に一回は圏内に入るから、こうして花を供えてるの」と奥さん。花のそばに小さなお坊さんの人形を置く。「この人形、お経をあげてるの。お坊さんが来れないからね」。



20km圏内に設置された検問所

常磐線の小高駅へ。駅前商店街は地震で崩れたままの状態。駅のそばに自転車の駐輪場があり、たぐさんの自転車倒れたままになっている。この駅からたぐさんの中学生、高校生があの日も通学していた。「通学用



花の右下にお経を読むお坊さんが

自転車 富1中031」  
「Odaka Technical High School 08・190」。富岡町第一中学、小高工業高校生の自転車だろっか。

「中高生も津波で流された子がいてね。家も流されたので、形見はあの自転車だけ、という子もいるのよ。でもここが立ち入り禁止区域でしょ。形見の自転車さえ、取りに来れないの」。奥さんの横川千恵さんが、「地元の人しか知らない情報」を伝える。

### 酪農家たちの 血の涙のよう

てくれる。この地震で倒れた自転車の何台かは、主がいなくなつて1年、ここでひっそりと倒れ続けているのだ。

商店街から山側の集落に入っていく。建設中の常磐高速道路を越えたあたりで、アラームが鳴り出す。

「2マイク口を越えると、警戒音がるんですよ」。横川さんが握るハンドルの隣に、緑色の線量計。車内で2マイク口、外はもっと出ているはずだ。

車が峠道を駆け上がったところに「牛に注意」という手書きの看板。野生化した牛が道路を横断している時に、車とぶつかる事故が多発したのだ。「牛に注意」の看板を何枚かやり過ぎたところにY牧場があった。

牛の頭蓋骨が4つ並び、「東電、国は大損害を償え」という怒りの看板。牧場主が書いたものだろう。その赤い



何台かの自転車は「主人」を失っている...

ペンキの文字は、農民たち、酪農家たちの血の涙で書かれたようだ。ピーピー。線量計が不気味に鳴り続ける。空間線量で毎時9マイクロシーベルト。もしここに1年立っていれば、78ミリシーベルトの被曝。おそらく何年かでがんになってしまふ被曝量だ。試しに線量計を地面に置いてみる。9、10、12...。数値は牧草の上で14マイクロ、森の中で15マイクロに跳ね上がった。これは除染できるレベルではない。ここは半永久的に人が入ってはならない場所になってしまった。

「原発さえなければ、私た

ちは故郷を捨てずにするんです。私たちの先祖がつないで、戦争に行つて帰つてきても、ずっとこの土地と一緒に、自然を大事にしてきたのに...。まさかこのような形に何もかも失うなんてね...」。この村で生まれ育つた奥さんがつぶやく。

浪江町を抜けて双葉町へ。さすがにここで放射線防護服を着る。JR常磐線双葉駅前、やはり線量計がピーピー鳴り出す。原発から5キロ圏内に入る。車内で線量が6、7、8マイクロと上がっている。双葉町体育館が見える。車が体育館の方へカーブを曲がりきつたとき、その看板が飛び込んできた。

「原子力 明るい未来のエネルギー」。

何という皮肉な標語。プラックジョークのような看板。この声がちりちり聞こえる。原発の補助金だろう、駅舎も体育館も立派な建物。それだけによりいっそう悲しい現実が目の前に展開している。

### 補助金で建てた立派な 駅舎や体育館も

3・11から一年が過ぎた。昨年末政府は「原発事故は収束した」と一方的に宣言したが、被害は延々と続いており、補償も生活再建も遅々として進んでいない。大量の汚染水は海に流れ続け、爆発で傾いた第1原発からは、今も放射能が漏れ続けている。故郷を、生活を、復興への夢や希望を根こそぎ奪っていく原発事故。そんな中、政府も電力会社も「電気が足らなくなる」と福井県大飯原発の再稼働を急いでいる。彼らが言うのは、経済性や効率。東京・永田町で駆け引きを続けているうちに、彼らの言葉からは人間らしい温かさが失われ、政治への深い失望が生まれる。「政府のエライさんや電力会社の社長さんは、県庁とか市役所には来て謝罪するが、このような汚染された現場には来ない」と横川さん。再稼働を言う前に東電も政府も今一度、現場へ来て、この現実を目の当たりにすべきなのだ。

何という「明るい未来」なんだろう...